

〈論文〉

ドルチェ&ガッバーナのコマーシャルが 箸を食器具とする日本人に不快感を 与えるとしたらその理由は何か

— 日本・フランス両国における食文化の

歴史的及び社会的背景からの一考察 —

柴 田 恵 美

要 旨

数年前、イタリアのファッションブランド「ドルチェ&ガッバーナ」によって制作され、その中で若い東洋人女性に、箸を棒の様に突き立てる事で大きなピザを取り分けさせようとした広告動画により、不買運動などの大きな騒動が持ち上がった。本稿では、この動画が日本人に不快感を与える要因について以下の点を指摘した。それはまず、日本料理を食する際に見いだされる様な、相対する料理を、それが作り出す世界を害することなく美しく頂こうとする日本人の洗練された姿勢や美意識を破壊する「突き箸」という不作法への嫌悪感、則ち日本人特有の美意識が汚されることへの嫌悪感と、神様から賜った尊い命を有難くいただくという、日本人古来の神道的姿勢及び神そのものを冒瀆する表現方法への抵抗感を日本人が抱くからである。次に、西欧においても「突く」という行為が、今なお「野蛮」性を想起させる事実を鑑みるなら、「突き箸」という不作法を取って東洋人にさせるという演出の裏に、箸文化の中にある東洋人に対して西欧側が抱く、ある種の侮蔑意識が感じ取られるからである。そして最後に、突き箸という不作法が、フランスを始めとする現代の西欧社会において、社会的富裕層、上流階級、エリート層がよしとする「(身体的)ヘクシス」にも反するものである事を鑑みるなら、これを行う東洋人の描写は、東洋人への潜在的階級差別意識を表象する可能性に直結するからである。

キーワード：礼儀作法，フランスの食文化，ドルチェ&ガッバーナ，フランスの階層意識と「ヘクシス」，文化表象，箸文化

I) 序 論

2018 年末，少し前のことになるが，イタリアのファッションブランド「ドルチェ&ガッバーナ」が制作した広告動画が物議をかもし，主に中国でこのブランドの不買運動が起こるなど，大きな騒動が引き起こされたことがあった。動画には以下のような場面が収められている。まず，中国人と思しき一人の若い女性が，箸を 1 本ずつ両手に持ち，棒の様に突き立てて大きなピザを取り分けようとする。当然，両手に分けて使用され，棒状となった箸でいくらピザを上からつついてもそれを切り分けることは出来ない。そこで，彼女は，素手でピザを切り裂き，切り裂いたピザの一片を，今度は，箸で持ち替えて口に運ぶ。そして，ピザを口に入れることが出来た自分に対し，「良くできました！」と言わんばかりに，ニコニコ顔の彼女自身が箸を握ったまま拍手を送るのである。さらに，冒頭部分では，「今日は彼女がお箸という棒切れのような道具で，偉大なる我々イタリアの食文化『マルゲリータピザ』を食べようとするのをお見せします」というナレーションが流される，という具合である。結果として，中国では，「中国人を揶揄するものである」，「箸を使う東洋文化への侮辱だ」といった抗議の声が多数上がり，不買運動へと発展した。この動画が日本でも大々的にニュースに取り上げられたのは周知の事実であろう。

一方，食器具として同じ箸を使う日本人の反応は，全般的に見ると，中国人のものとは少し異なるものであった。全体的な不買運動などは起こらなかった上に，日本のテレビやインターネットでの意見には「中国人は騒

ぎすぎる」「中国人は怒りすぎだ」というようなコメントも多くあったとされている⁽¹⁾。のみならず—これは、この騒動への上記のような日本人の反応に対し、やはり疑問を抱かざるをえなかった筆者も驚いたことなのだが—、2019年、つまりこの騒動の翌年の春に、ドルチェ&ガッパナというブランド名を歌詞に取り入れた一曲の歌がヒットしたのである。勿論、このことによって、作品としての歌の価値、評価自体が左右されることはあってはならないのだが、筆者が驚いたのは、前年に物議をかもし、アジア文化を揶揄したとも解釈しうる、いわば、被差別的なイメージを連想させる用語、ブランド名を、躊躇なく、多くの選択肢の中から敢えて選んで作詞・作曲者が用いたことであった。

日本人は、概して温厚で、「言わぬが花」という美意識を持ち、人間関係においても調和を重んじてきた民族であることは良く知られている。西欧諸国などに行って、たとえ差別的と感じられる対応を受けたとしても、声を大にして怒りをぶつけ、その非正当性を正す為に、その場で即座に抗議を行う者は少ないだろう。どう解釈してもこれは東洋人に対するある種の差別的対応や発言だと思われる事態に相対した場合でも、その場ではぐっと自身の感情を押し殺すという経験をした者も少なからず存在するはずである。

確かに、西欧人による東洋人への差別発言が、微塵の悪意もなく、彼らの無意識のうちになされてしまっている場合も少なくないと思われる。また、一方で、こうした西洋人による差別意識や発言自体に全く無関心な日本人や、東洋人の中でも自分達は特別で、西欧の差別意識の対象にはなっていないだろうと考えている日本人も存在するに違いない。しかし、当時、ドルチェ&ガッパナのこの動画に対し、内心では不快感や怒りを感じ

(1) サンドラ・ヘフェリン、「ドルチェ&ガッパナの動画は何が問題だったのか—欧州に根強く残る『アジア人軽視』という問題—」。The Asashi Shimbun, Globe+, 2018年12月5日付、コラム参照。

じた者が少なくはなかったことも、また否めない事実なのだ。

本稿では、まず、日本人がこの動画に対し、不快感やある種の怒りを感じるとしたら、それはどの様な点に関してなのかを示し、次に、日本とは反対の立場である西欧—とりわけ、旧体制下、食や服飾といった様々な文化的分野における中心地となり、以後、西欧諸国に大きな影響を与え、現在でも世界的な規模で影響を与え続けているフランス—の食卓での礼儀作法の意義を歴史的に考察することにより、このCMに潜在する西欧側から東洋に向けられたある種の差別意識をあぶり出し、それが日本人に不快感を与えうる要因について考察していきたいと思う。

Ⅱ) 本 論

箸文化の中で生きる日本人がこの動画に対して感じる不快感、怒りの要因となるもの、それはまず、伝統的な箸の持ち方や扱い方、すなわち正しい作法を知り、それを実践する者がマナー違反を目にする時に感ずる、「こんな使い方を私達はしないのに」という不当性への反感であろう。日本の食卓において、「突き刺す」という所作は許されていない。奥田和子も、著書『箸の作法』の中で「箸使いの作法に反することは、自らの醜態をさらし、見る者の嫌悪感を誘い、これをうんざりさせることに繋がる」と述べている⁽²⁾。

しかしながら、こうした反感や嫌悪感を生じさせるものは、実は、マナー違反という表面的な現象だけにはとどまらない。マナー違反に対する反感や嫌悪感の裏には、マナーや作法そのものを支える集団固有の精神性を否定されたことへの抗議の念が存在することを忘れてはならないだろう。それならば、箸食の伝統的なマナーや作法を支える集団の精神性、す

(2) P.104 参照。

なわち日本人固有の箸文化における精神性とは一体どのようなものであろうか？

1. 箸食の作法を支える精神性について

作法を支える精神性の一つ目は、「美意識」である。茶道や舞踏という他の文化表象においても同様のことであると思われるが、それぞれの所作を生み出すもの、その源泉の一つは、それを実践する集団が共有する固有の美意識であると言えよう。こうした美意識は、日本料理における、料理を見た目に美しく盛り付ける技、例えば、食器と調理された食品の組み合わせによって花鳥風月のような美しい自然の一風景を眼前に再現させるというような技にも共通するものである。一定の理念に基づいた美意識を体现する為の方法論、それがマナーや作法なのであって、その美意識を完璧に表現するためには、その形を正確に再現することが必要である。作法は、盛り付けられた料理が表現する世界、例えば、四季の風景の美しさなどに調和し、その美しさを共有するものであらねばならないのであって、それを害するものであってはならないのだ。にもかかわらず、禁止された、いわば醜い所作をこれ見よがしに披露する件の動画は、日本人の目指す、そうした美しい調和の世界への経路を破壊すると同時に、どんな料理であれ相対するものを、それが作り出す世界を害することなく美しくいただくこうとする、彼らの洗練された姿勢や美意識を無視するものとなっている。つまりそれは、その集団の誇る美意識を無視、否定すると同時に、その集団そのものを揶揄し、見下すことと同義なのである。

それでは、二つ目の精神性とは何であろうか？ 二つ目の精神性について述べる為には、日本における箸文化の発祥と定着の課程を考察していく必要があるだろう⁽³⁾。

(3) 日本における箸文化の発祥と定着の課程を考察するにあたっては、主とし

世界的に見て、食事の際、食べ物を口へ運ぶ手段は主に3種に分類されるという。すなわち、①箸食（匙との併用）、②手食、③スプーン・ナイフ・フォーク食の3つである。日本では、3世紀、『魏志倭人伝』の時代には手食であったらしいが、奈良時代にあたる8世紀、『古事記』『日本書紀』が編纂された時代には、少なくとも主食である飯を食する時には、主に箸のみを使用していたことが分かっている。勿論、遣隋使や遣唐使による中国との交流や百済・新羅との交流により、当初は箸と匙が組合せて使用されており、平安時代になっても身分の高い者は箸と匙を使い分けていたらしいものの、先に挙げた奈良時代の記録文書その他の遺跡などに関する資料によれば、奈良時代にはすでに匙の脱落は始まっていたとされる。そして現在、箸文化を共有する中国や韓国においては箸と匙との併用が見られる中、同じ米を主食とする食事圏で箸食だけという形式は日本のみに見られるものであるという。

箸の素材や材質の相違には身分の高低や用途の違いが表されていた。庶民はもっぱら木製を用いていたものの、貴族のような身分の高い者は銀製と木製の箸を用途によって使い分けていたとされる。銀製の箸は食事の前に飯を備える時に使い、実際に飯を食す時にはもっぱら木製の箸を使うという具合である。漆も縄文時代から存在はしたものの、塗り箸が登場するのは江戸時代を待たねばならず、平安時代の貴族社会においても、家具調度類は塗り物であった一方で、日常の食事に用いる箸は、やはり素木で作られた木製のものであった。しかも、それは一回の食事に一度だけ使用されるに限られていたのだ。

何故、素材を素木にかぎり、素木で作られたその箸の使用を一度だけに限定したのだろうか？ そこには、日本人特有の宗教的背景、神道が関

て、向井由紀子、橋本慶子『箸／ものと人間の文化史；102』、法政大学出版社、2001、高倉洋彰『箸の考古学』同成社、2011、奥田和子『箸の作法』、同時代社、2013を参照。

わっている。

奥田や向井も述べている様に、神道的観念においては、御饌を神に捧げる折、もしくは神から与えられた食べ物を最初に取り分ける時には俗手を使わないという信条がある。神に捧げる、もしくは、神からいただく食べ物を神聖なものとし、手づかみすることによってそれが穢れないようにという配慮から生じた信条であるが、この信条から箸が用いられるようになった。神道は稲作と関係が深いことは周知の事実である。だからこそ、箸は、稲作の広まった弥生時代の末期から神事儀礼の中で誕生したのであろう。日本古来の神道の教えでは、森羅万象に神が宿るとされており、「神」の多くは食物であったという⁽⁴⁾。従って、神聖な素木を削って作った箸が一度のみの使用に限られ、再度使用するということがなかったこと、つまり使用する事で汚れた＝穢れたものとなった箸を、聖なる「神」の領域に属するものに使うことがなかったことも、穢れを忌み嫌う神道的影響下においては必然であると言える。食べ物は、神聖な神の体から分け与えられた尊いものなのだ⁽⁵⁾。

以上のような歴史的経緯からは、箸食を行う日本人の持つ二つめの精神性が指摘されうる。それは、神様から賜った尊い命を有難くいただくとい

(4) 高島元洋「神道における『食』」, お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書, 平成20年度 学内教育事業編, 2009, pp. 310-315 参照。この中で高島は, 「供饌は, 殺され(大宜都比売など), 破壊され(土偶など), 現世のすがたをうしない(神饌など), 目にみえない他界に送りこまれる。神饌は, 殺されるわけでも破壊されるわけでもないが, 神聖なるものとして 現世のすがたをうしなう。神聖であることは, 殺され, 破壊されることと同義である。食物は, 供饌として他界に送りこまれる。たとえば大宜都比売(おほげつひめのかみ)などの場合, これは食物が供饌として死ぬわけであるが, たんなる食物の死ではなく神が殺される伝承となる。死んだ食物は神になるのであろう。こうして他界には食物の神がいることになり, 供饌は神の死として記憶される」と述べている。

(5) 向井由紀子, 橋本慶子, 前掲書, pp. 296~302 参照。

う姿勢である。従って、「突き箸」は、下品な所作であるだけでなく、こうした尊く有難い命を軽んじる行為⁽⁶⁾、ひいては神そのものを冒瀆する行為ともみなされよう。

さらに興味深いのは、「箸とは柱のはし＝神の御柱を意味し、それが神と人を結ぶ＝はしわたしする神聖な道具」であるとされている点である。箸のおき方は襲名披露などの時に置かれる扇子の置き方と同じで、自分の正面つまり料理との境に真横に置かれた箸は、生きる人と生きる為の糧との橋渡しとして、単に食べ物を挟んで口に運ぶ道具以上に食事を意識させるところがあり⁽⁷⁾、そこには「これを使う神や人の靈魂が宿る」とされる⁽⁸⁾。こうした、生きる人と生きる為の糧との橋渡しの役割を持つ箸を、その度に丹精込めて自らの手で削って作り上げるという行為からは、自らを生かしてくれる神と神からの賜り物との対面の瞬間に、その都度、全霊をもって対峙し、感謝の念を込めるというもう一つの姿勢が立ち現れてくるのである。食事という場を借りた神と人間との対峙において、食べ物という賜り物だけでなく、神そのものに対する人間の感謝に満ちた真摯な姿勢である。件の動画は、箸という道具に込められたこのような日本人の神への思いや姿勢を、そうした箸の存在意義と共に破壊するものなのである。

ドルチェ&ガッバーナの動画は、日本人特有の美意識を否定し、箸文化に生きる日本人にとっての神と神から賜った尊い命、ひいては、それに真摯に向き合う日本人の精神性、本質そのものを軽んじ、揶揄するものと解釈されうると同時に、不快感を与えうるものだと言えるだろう。

(6) 奥田和子、前掲書、p.104 参照。

(7) 向井由紀子、橋本慶子、前掲書、pp.296～302 参照。

(8) 一色八郎『箸の文化史』、お茶の水書房、p.iii、p.85 参照。

2. フランスに代表される西欧のマナーからみた「突き刺す」という所作

それでは、反対に、この動画を作成した立場である西欧の人々にとって、「突き刺す」という所作は食卓においてどのような心象を与えるのか。旧体制期以降、制度を含め、食において中心的な役割を果たし、西欧諸国に大きな影響を与えてきたフランスの例をとって考察していきたいと思う⁽⁹⁾。

「突き刺す」という働きを担う食器は、ヨーロッパにも存在する。フォークである。フォークは、元々調理場では肉を切り分けるのに使っていた。食べる為のフォークはカトリヌ・ド・メディチスがアンリ2世の元に興入れした折、イタリア経由でフランスに流入する。しかし、熱々のパスタを好んだことでフォークという食器が15～16世紀には普及していたイタリアを除き、西欧、フランスでは17世紀になるまでは使われなかった。先端が鋭いため凶器のイメージが強く、食卓にそぐわないと考えられ、特に女性は使いたがらなかったという。フォークが持つ「突く」「刺す」という元来の機能そのものが粗野で野蛮なイメージを与え、そうしたイメージを与える食具を自分自身の口に敢えて向けるという行為が、当初、特に貴婦人たちには受け入れがたかった為であろうと推測されるが、それ故に、食器の中でもフォークの普及が一番遅かったのだ。ルイ14世の母であり、スペインから興入れしたアンヌ・ドートリッシュもルイ14世自身も使用せず、彼らは3本の指を優雅に駆使しつつ手食する事の方を好ん

(9) ヨーロッパ、特にフランスの食卓史の史実に関しては、主として、北山晴一『世界の食文化16—フランス』、農山漁村文化協会、2008、パトリス・ジュリネ『美食の歴史2000年』、北村陽子訳、原書房、2011、J-L・フランドラン、M・モンタナリ『食の歴史Ⅱ』、宮原信、北代美和子監訳、菊地祥子、末吉雄二、鶴田知佳子訳、藤原書店、2006。及びアントニー・ローリー『美食の歴史』、池上俊一監修、富樫環子訳、創元社、1996、高平鳴海、愛甲えめたろう、銅大、草根胡丹、天宮華蓮『図解 食の歴史』、新紀元社、2012を参照。

でいたという⁽¹⁰⁾。1670年代以降、ルイ14世の宮廷では、ようやくフォークを使用しない者が流行遅れになっていくが、この時期になっても、フォークを食卓で使う為には、左手に持つ、口に運ぶなどの一連のしぐさにおいて、何よりも「際立たねば」ならず、その為の宮廷の礼式が細かに定められていたのだった。こうした細かな規定は、それらを習得しない限り、フォークの使用という行為自体が、貴族階級が他の階級に対して誇示すべき社会的差異、つまり「抜きんでいる」こと、を顕示する為の目安にはならなかったことを示している。言い換えれば、こうした事実からも、当時のフランスの宮廷、貴族社会において、フォークの使用がいかに定着しにくかったかを我々は伺い知ることができるのである。

一方、17世紀末、フォークが食卓に受け入れられていく背景には、人間が「不快感」を感じる際の基準の変化があるとされる。社会学者ノルベルト・エリアス（Norbert Elias, 1897-1990）が著書『文明化の課程』で述べているように、食事にあたって、ある行為が「文明化」されたものかされていないものを決定する際に基本的なよりどころとなるのが「不快感」であり、「不快感」を感じさせる基準が時と共に変化した結果、食卓でのフォークの使用が受け入れられていったというのだ⁽¹¹⁾。つまり、「突

(10) 中世から17世紀、ルイ14世の宮廷においてさえ、手づかみで食べる事が主流であった。これは、フランス人が野蛮であったからではなく、食べ物は神の恵みであるから、それに触れて良いのは神が創った人間の手のみであり、道具の使用は神への冒瀆であって食器は汚れているという中性ヨーロッパの聖職者たちの教えからきている（詳しくは、高平鳴海他『図解 食の歴史』、新紀元社、2012参照のこと）。第1部で述べた、神に捧げる食べ物を、神そのものが宿る神聖なものとして受け止め、これを手づかみすることによって穢れないようにという配慮から箸を用いた日本人の神道的態度とは真逆の現象であると思われる。神道とキリスト教の考え方の違いが表れていて興味深い。

(11) ノルベルト・エリアス『文明化の過程』、赤井慧爾、中村元保、吉田正勝訳、法政出版局、1983、p. 268 参照。

き刺す」ものであるフォークを自分自身の口に向けることによって自身及び他者に与えるであろう不快感よりも、手食によって汚れた手を他人に見られることの方に、人々がより不快感を抱くようになった為にフォークが普及したということである。しかしながら、この変化は純粋な比較の問題であって、フォーク自体のイメージの刷新を直接的に意味するものではないかろう。フォークの受容は、フォークが持つ「突き刺す」という機能そのものに対する凶器や野蛮性のイメージが好転したことを直ちに意味するものではないのである。

それならば、フォークのイメージは、これ以降、例えば、18世紀末の旧体制の終焉と共に好転していくのであろうか。著書『表象の帝国』の中に設けられた「箸」という章で、20世紀の哲学者であったロラン・バルト（Roland Barthes, 1915-1980）は、日本人の用いる箸と西洋人の用いるフォークとを対比させながら、以下の様に述べている。

思うに箸というものは、分離するにあたって西洋の食卓でのように切断して取り押さえる代わりに、二つに分け、ひきはなし、取りあげるものなのである。箸は決して食べるものを暴行しない…二本の箸は…ご飯の断片の底にすべりこみ…茶碗の中のたべものの雪を、シャベルのようにはこんで、唇の中に消えさせる。こういう箸の使い方のあらゆる点で、箸は西洋のナイフに（そして猟師の武器そのものであるフォークに）対立する。箸は…ぐいと掴まえて手足をバラバラにして突き刺すという動作を拒否する食器具である⁽¹²⁾。

(12) Roland Barthes, *L'Empire des signes*, Edition d'Art Albert Skira S.A, Genève, 1980, pp.26-27. 和訳は、ロラン・バルト 『表徴の帝国』 宗左近 訳 ちくま学芸文庫 2014, pp.031-034 参照。1996年第1刷発行。2014年の訳本は第19刷。

ここでバルトは、フォークについては、「取り押さえる」「暴行」する、「猟師の武器」「手足をバラバラにして突きさす」という言葉を用いてその機能を説明し、箸については、「分ける」「ひきはなす」「取りあげる」という言葉によってその用途を説明しつつ、これを「ぐいと掴まえて手足をバラバラにして突き刺すという（フォークによって実践されるような）動作を拒否する食器具」として紹介している。一言でいうなら、掴まえた食べ物に対し、突き刺しバラバラにするといった暴行を加える「凶器」であるフォークと「凶器でない」箸とをはっきり対比させているのだ。

バルトのこの記述から導かれること、それは、『表象の帝国』が書かれた1970年代以降、フォークの機能に関する上記のような記載に関し、それを否定もしくは訂正するような注釈などが施されることなくその翻訳本の版が重ねられている現状から鑑みるに⁽¹³⁾、おそらく21世紀の現在においてもなお、西欧の識者から見れば、フォークは「凶器」や野蛮性のイメージと結びついたものであり、一方で、本来「突き刺す」という機能が存在しない箸は、野蛮性のイメージから遠い食器具として存在しているという事実である。

こうした、文化的な事実があるにもかかわらず、箸本来の機能にはないばかりかむしろ禁じられている動作、本来はフォークのものであった「突き刺す」という野蛮で凶暴な動作を、登場人物、すなわち箸文化に属する東洋人に敢えて行わせたことにより、ドルチェ&ガッバーナは、西欧の視聴者に対し、東洋人は野蛮であるというイメージを与え、そのイメージを結果的に世界に広めてしまうという過ちをおかしてしまったわけである。フォークに関する文化的・歴史的背景を知る西欧の人々から見ても、これは否定することのできない過ちであると言えるのではないだろうか。

(13) Roland Barthes, *L'Empire des signes*, Skira, Paris, 1970.

3. 礼儀作法の歴史的観点からの考察

次に、食卓での礼儀作法の意義を歴史的に考察することによりこの問題を考えていきたいと思う。

先にも述べた通り、とりわけ絶対王政期におけるヨーロッパにおいて、フランスは、食の分野でリーダー的役割を果たしてきたと言えるが、プーランは、アンシアン・レژیーム期に実践されていたフランスの食卓における礼儀作法を「顕示的食習慣の定式化」と定義している。「顕示」とは何が示されているのか。そしてそれが持つ特徴とはどんなものなのであろうか⁽¹⁴⁾。

それはまず、食卓における作法の一つである給仕法の中に如実に表れていた。アンシアン・レژیーム期に採用されていたフランス式給仕法における作法では、料理は一度にすべてのものが食卓に並べられ、会食者が食べ終わると、料理が盛りつけられていたすべての器を一斉に下げるという方式がとられていた。そして、一回の宴会につき、それが3回から5回に渡って繰り返されたのである。また宴会における出席者の席次を決める権利、つまり席次権は主催者である招待主（アンフィトリオン）が握っていた為、料理を取り分けて食べる為に最も有利である中央の席に招待主自身が座ることができたばかりでなく、有利な席、不利な席を恣意的に他の招待客に振り分けるといった裁量も招待主に任されていたのだ。さらに、席次の順番は、基本的には身分の高低で決まったものの、敵対する人物をわ

(14) フランス中世から旧体制下、現代に至るまでの食や食卓の歴史に関しては、主として Poulain J.-P. Et, Nerinck E. *Histoire de la cuisine et des cuisiniers, techniques culinaires et manière de table en France du Moyen Age à nos jours*, Paris, Lanore, 2000, ジャン＝ピエール・プーラン&エドモン・ネランク, 『プロのためのフランス料理の歴史』, 山内秀文訳, 学習研究社, 2005, 北山晴一『世界の食文化 16—フランス』, 農山漁村文化協会, 2008, アントニー・ローリー『美食の歴史』, 池上俊一監修, 富樫環子訳, 創元社, 1996 を参照。

ざと不利な席に配置して面目をつぶしたり、さらにその人物の近くにその人物と仲の悪い人物を配置することにより、料理を回してくれるよう依頼することを不可能にさせるといった、さらなる意地悪をしかけることが招待主にはできたのである。また反対に、身分や権限の高さを象徴する中央の席に座ることのできる者は、他の会食者からものを頼まれる頻度が高く、その都度、誉め言葉と尊敬のまなざしを集めることができたという。つまり、招待主自身の権力と威光をひけらかし、カリスマ性をアピールできたという意味において、フランスの食卓における礼儀作法は「顕示的」であったわけである。

それでは、給仕法という作法の他に、食卓ではどんな礼儀作法が必要とされたのであろうか。会食という場で権力と威光をひけらかし、カリスマ性をアピールできた招待主をはじめとして、その場に招かれる者たちひとりひとりに要求された礼儀作法とはどんなものであったのか。また、それはどのような意味において「顕示的」であったと言えるのか。この疑問に対する答えを得るには、まず、カトラリーや食器の使用方法の変遷という観点からの考察が必要であろう。

フランスにおいて、スプーン、ナイフ、汁物の器、杯、トランショワール（取り皿の役目を果たした乾燥させたパン）の代わりに平皿が使われるようになるのも、16世紀、ルネッサンス期を迎えてからであった。それまでは、料理は手づかみで口に運び、ナイフも杯も個人使用はせず、汁物の器でさえ2～4人で共用していた。ナイフは、肉を切るのに使われたが、ルネッサンス以前は大皿に添えられているだけで各人が持つことはなかった。16世紀頃から起こるカトラリーや食器の「共用」から「個々人専用の使用」への移行というこの転換によって、人間関係に表れた変化として、一体どのようなものが挙げられるであろうか。

この変化には、北山晴一が指摘するように⁽¹⁵⁾、次の2点があげられよう。まず、上下関係を越えた人付き合いの親密度が薄くなり、その距離が広がったことである。主君と家来が同席し、ワイワイガヤガヤと皆で身体を接触させながら食事をとっていた中世初期に対し、ルネッサンス以降、各々が独立した食器を用いることで前時代的身体接触状況が消滅するからである。また、一方で、下品なことを嫌う女性が同席する機会が増すことも相まって、『上品なマナーと礼儀作法の手引き』（エラスムス, Desiderius Erasmus, 1466～1536）などのマナー本も出版され、共同食器に直接口をつけてはいけないなどのマナーの厳格化が生じてくる。

すると、結果的に、身分間の精神的隔たりと共に物理的隔たりが確たるものとされる一方、なおかつ、洗練された厳格なマナーを習得した集団の包摂（一定の範囲の中に包みこむこと）とそうした作法を身に付けられない者が排除されるという事態が引き起こされることになるのである。

また、マナーの習得は当然、そうした会食に呼ばれるに値する身分にある者を対象とし、身分の高さとも比例している関係から、現象は、会食者の身分や階級による包摂と排除の方向へと向かっていく。一言でまとめるなら、カトラリーや食器の「共用」から「個々人専用の使用」への移行及びマナーの厳格化という歴史的流れによって、身分格差が強調されていくのである。いわゆる「階層秩序」の先鋭化である。

さらに、17世紀以降に目を向けると、この時期にはマナーや作法だけでなく、食卓での「洗練された会話」にも重要性が置かれるようになる。とりわけ、気に入った者同士での会話を楽しもうとする「食堂」という食事専用の部屋ができた18世紀にもなると、食卓における会話が重要視されるようになったという。

良く言われるエスプリの効いた会話、古代ギリシャ・ローマの故事や哲

(15) 北山晴一、前掲書、pp. 126-127 参照。

人の言葉を引用した格調高いやり取り、会食者の心を魅了する会話術には当然教養が必要とされるだろう。当時、深い教養とそれに基づく洗練された会話術を会得しうるのは、当然高い身分と財政的に余裕のある立場＝貴族階級であることが必要であったことは言うまでもない。その結果、作法だけでなく、会話、教養の面から見て、この人間は、貴族階級ではなく、それに相對する民衆階級であると見なされた場合、その人物はすぐに食卓から排除されたのだという。つまり、作法、教育、会話の洗練という観点からの人物の包摂と排除がここでも行われたわけである。いうなれば、貴族階級対民衆階級という対立関係と身分格差がそこに浮き彫りにされていたことが理解されるのである。

さて、件の動画を作法と会話という観点から見直すとどのようなことが言えるだろうか。動画において、登場人物である女性は、ナレーターに語りかけられても、話すことはない。テーブルに両肘をついたままというこれも作法に反する体勢で、一言も返すことなく、ただ、へらへらと笑いながら、ビザを箸で突き刺している。そして、突き刺すもののうまく食べられないという不作法を繰り返すばかりなのである。また会話という観点からしても、洗練どころか、そもそも会話すら成立しない次元にあるのだ。

先に述べた様に、西欧における食事の作法が本質的に権力構造を忠実に反映すると同時に階層秩序を具現化するものであり、そこに、「権力と威光」及び「身分格差」が「顕示」され、その裏に「階層」の違いという差別的イメージが隠されてきたものであるとしたら、そして、東洋の箸に代わるフォークの突くという所作が現在においてもなお野蛮性のイメージに結びつくとしたなら、「突き箸」という不作法を、敢えて、そして一言も言葉を発することのない、ただへらへらと笑うだけの東洋人に行わせた事実はどう解釈されうるだろうか。そこには、洗練された西欧社会の貴族性から排除された、作法を身に付けることのできていない野蛮な民衆階級である東洋人の姿が映し出されていると解釈することが可能になるのではあ

るまいか。もっと言えば、そうした姿を揶揄するという西洋人の姿勢が透けて見えてしまうことを完全に否定することはできないように、筆者には思われるのである。

勿論、旧体制下での政治的・文化的背景を現代的な文化事象に当てはめることへの反論もあるかもしれないし、階級差から生じる差別意識がいまだに存在するのかという疑問も呈されるかもしれない。しかし、この点に関しては、2019年に、フランスのメディア・ニュース会社「BRUT FR」が、ネット上に学校で清掃する日本の小学生の姿を紹介した時の出来事を思い起こせば、その存在が否定できないものであることは自明の理であろう。

2019年1月19日付けのtwitterに、「BRUT FR」は日本の小・中・高の学生が学校の教室やトイレ掃除をしている動画を、〈Le Japon, le pays le plus propre du monde ?〉「日本は世界で最も清潔な国なのか？」という見出しと共に挙げており、そこには、以下のような説明文も添えられていた。

Des supporters qui nettoient leur tribune après le match, des écoliers qui nettoient tous les soirs leur salle de classe... Le Japon est probablement le pays le plus «propre» du monde. Voilà pourquoi.

試合終了後、（自分たちが座っていた）観客席を掃除するサポーター、放課後毎日、自分たちの教室を掃除する小学生たち、,、日本が世界で最も清潔な国であろうことの理由がここにあるのだ。

また、動画の中には日本人へのインタビューもあり、掃除は、謙虚さや慎み、そして連帯を教えることを目的とした教育の一環であり、その精神

は、神道の浄化という思想に由来するものである事も説明されている。

「掃除」という実践を通じたこの様な日本教育に対し、「素晴らしい！汚れたフランスを払拭する為に、日本のこの精神をみならうべきだ」と賞賛の声を上げるフランス人も確かに多かったが、一部には、以下のような感想を書き込む者もいた。

On leur apprend rapidement l'esclavage!

こうすれば、手っ取り早く奴隷の仕事を教えてやれるね！

自分たちが使って散らかしたり汚したりした場を掃除する事、その行為に対し、奴隷の仕事というイメージを即座に連想すること自体が、西欧の歴史的経緯から生まれた、いわゆる支配階級に特有な一種の差別意識からくることを否定することは出来ないだろう。

一方、フランス在住の一部の日本人の中には、日本人のサッカーのサポーターが観客席を掃除したり、日本人がパリを掃除し始めた時に、「迷惑だ」と発言する者もいたという。西欧では掃除をするという行為が即座に下層階級のイメージにつながる為、この動画が流されることにより、掃除を実践する日本人＝下層というイメージが定着してしまうことを、彼らが懸念したからだった。上層階級に属する人々は、下層に位置付けられる仕事はしないというのが通常なのだ⁽¹⁶⁾。こうした在仏日本人の発言は、彼らが差別意識を認識していること、すなわち、フランスの現代社会においてもなお階層差別が存在すること、仕事、所作、マナーといった人間の行いが一定の階層の所属と結びつくことの証左なのではあるまいか。

もともと礼儀作法の習得は、旧体制下においては貴族が貴族であるこ

(16) Ulala, 「フラぷらぷら」, 2020年12月8日ブログ参照。

と、すなわち上流社会に属することを他のメンバーから承認してもらうための必須条件の一つであった⁽¹⁷⁾。19世紀になっても、それは、斜陽であった自らの階級に、経済的に成り上がった新興ブルジョワジーが入り込むことを防ごうとして、貴族達が宮廷社会に設定した彼ら専用の作法であり続けた。しかし、時を経る中で、両者間で結ばれた婚姻なども一因として礼儀作法の流入が起きたために、礼儀作法やマナーは、ついに、両者に共通するものとなる。その結果、こうした礼儀作法は、現在、貴族及びブルジョワジーというこの二つの階級に属さない階級、すなわち「富裕層、上流階級」以外の者を蚊帳の外に置く為のコードとなっているのである⁽¹⁸⁾。

実際、社会学者、パンソン夫妻⁽¹⁹⁾も、フランス社会に現存する社会的不平等の存在を認めた上で、そうした社会的不平等とそれを正当化する支配の構造は、「文化資本」によっても維持されることを説いている。「文化資本」とは、金融や不動産のような経済資本とは別の、学歴、家庭環境によって伝達・継承される「正統的文化」をさす。大きな客間で多くの人をもてなせるような環境に育ち、文化的教養を育ませるように育てられた者は、自然と社交会になじんで育ち、高い学歴と広いコネクションを手に入れると同時に、スマートで巧みな立ち居振る舞いや服の着こなし方=作法を学び、芸術作品の鑑賞や批評の仕方を身に付けることができる。こうした立ち居振る舞いや服の着こなし方という作法、いわば、「正統的文化」の一事象は、「(身体的) ヘクシス⁽²⁰⁾」と称されるが、この「ヘクシス」を

(17) ノルベルト・エリアス『宮廷社会』、池田節夫他和訳、法政大学出版社、1981、pp.77-78、pp.148-150 参照。

(18) Michel Pinçon, Monique Pinçon-Charlot, *Sociologie de la bourgeoisie*, Nouvelle édition, Editoins La Découverte, p.52 参照。

(19) Michel Pinçon (1942-), Monique Pinçon-Charlot (1946-) 夫妻は、共にフランスの社会学者であり、共同研究によって、社会的富裕層及びエリートの研究に関する多くの作品を著している。現代社会研究所に所属。

(20) ギリシャ語。一定の性質を帯びた行為を反復することによって成立した魂の

自分のものとするには、長年の鍛錬、つまり、人の目に晒されるという外因的な鍛錬と、こうした鍛錬に耐え抜く一種の精神性が必要とされる。言い換えるなら、フランスにおいて上層階級、エリート階級に所属していることの証のひとつが、「ヘクシス」＝内面性と鍛錬によって育まれた優れた身のこなしや立ち居振る舞い＝作法なのである⁽²¹⁾。そして、「食べ方」というマナーを含めたこのヘクシスは、これを身に付けられていない階級を身に付けている階級から結果的に疎外するという働きも兼ねてしまうのだという⁽²²⁾。

さらに、研究対象はフランスが主であるものの、パンソン夫妻はその著書の中で、国際結婚による家族資本及び社会関係資本（いわゆる血縁関係や社会的コネクションをさす）の国際化が「ヘクシス」を含む文化資本の国際化と連動していることも示唆している。従って、フランスのみならず、貴族階級が血縁としてつながる、イタリア、イギリスなど他の西欧諸国においても、この「ヘクシス」という概念やイメージが共通しているであろうことは想像に難くない⁽²³⁾。

持続状態のことで、逆にそれがわれわれの選択を方向づける。そして、それに即して正しい選択がなされるところのヘクシスが、徳に他ならないとされる。『ブリタニカ国際大百科事典』参照。

(21) [原案] ミシェル・パンソン、モニク・パンソン＝シャルロ、[作] マリオン・モンテーニュ『リッチな人々』、川野英二・川野久美子訳、花伝社、2020、pp. 100-109。

(22) Michel Pinçon, Monique Pinçon-Charlot, *op.cit.*, p. 95 参照。給仕法がフランス式からロシア式に変化した後も、食卓の作法や会話の内容、教養が権力構造を忠実に反映し、階層秩序を具現化するものであるという実態には変わりがなかったことが、この記述から理解される。

(23) Michel Pinçon, Monique Pinçon-Charlot, *op.cit.*, p. 70 には、王族間の結婚による貴族階級の国際化は、旧体制下でもすでにフランス及び諸外国にも見られ、現代においても、財力のある貴族階級や有産階級に引き継がれていると記載されている。従って、国際結婚による家族資本及び社会関係資本の国際化が

そうであるならば、「箸でピザを突き刺す」という、上流社会が旨とする「ヘクシス」に明らかに反するこの所作が、行う者の野蛮性を伝えと同時に、見る者に一種の不快感を与え、なおかつ箸を使う東洋人に対する西欧の上層階級からの潜在的階級差別意識を示唆しうるものであることを、誰も否定することはできないだろう。

Ⅲ) 結 論

以上のような考察から、ドルチェ&ガッパナの動画が日本人に不快感を与える要因について、改めてまとめていきたいと思う。

この動画を目にした日本人に不快感を感じさせるもの、それは、まず、言わゆる「不作法」を強いられていることに対する反感であり、その反感を生み出すものは、箸食の伝統的なマナーや作法を支える集団の精神性を無視あるいは軽視、揶揄されることへの抗議の念である。その精神性とは、まず、茶道や華道、舞踏などの日本文化表象や日本料理の技の基盤をなす、日本人特有の美意識である。一定の理念に基づいた美意識を体现する為の方法論、それがマナーや作法なのであり、食においては、完成されたマナーや作法を用いて、相対する料理を、それが作り出す世界を害することなく美しくいただくとする姿勢を日本人は大切にするのである。こうした美意識や姿勢を不作法によって破壊されること、それが、日本人がこの動画に対して嫌悪感を抱く一つの要因となっている。二つ目の精神性

「ヘクシス」を含む文化資本の国際化と連動していることは間違いないことであるとと言えるだろう。また、[原案] ミシェル・パンソン、モニク・パンソン＝シャルロ、[作] マリオン・モンテーニュ、前掲書。P.75では、現代社会の上層階級・富裕層に属するか否かを見分ける基準のひとつとして、社会関係資本及び家族資本を所有する事を挙げ、家族資本の項目に、「家族の中に外国籍の者がいる」ことを挙げている。

は、箸には神の魂が宿ると同時に、食は神様から賜った神聖かつ尊い命を有難くいただくものであるとする、日本人古来の神道的姿勢に宿る。従って、「突き箸」は、神に対するこうした感謝の念を否定する下品な所作であるだけでなく、神そのものをも冒瀆する行為ともみなされる。冒瀆的行為の報いを畏れ、神聖なものを敬う傾向の強い日本人にとって、この動画は強い抵抗感を与えうるものであることは否めないのである。

一方、西欧においても「突く」という行為からは、現在においてもなお、「野蛮」のイメージが想起される。その上で、本来、箸においては禁止されている「突く」という所作を、敢えて東洋人にさせるという演出の裏には、箸文化の中にある東洋人に対して西欧側が持つ潜在的な侮蔑意識が隠されていると解釈されても仕方がないと言えるだろう。また、西欧の食事における礼儀作法が、野蛮性を排除し、洗練を包摂した結果であり、階層秩序を具現化したものであるという歴史的経緯を知る者からすれば、「突き箸」という不作法を行う東洋人は明らかに洗練から排除された野蛮な庶民階層に属するもので、上層階級から排除されたもの、洗練された貴族性に相対するものとして解釈することが可能なのだ。そして、それは、現代フランス他の西欧社会においても、社会的富裕層、上流階級、エリート層がよしとする「(身体的) ヘクシス」にも反するものであって、東洋人への潜在的階級差別意識を表象しうるものなのである。

さらに、この動画では、イタリアの代表的な料理に対し、「偉大なる」という形容を用いながら、東洋人に「突き箸」を行わせている。こうした演出も、この動画が、西欧文化の優越性の顕示と東洋文化の洗練からの排除を示しうるものであり、東洋文化に対するある意味での差別的感覚に根差す作品であると主張される一つの根拠となりえるのではないだろうか。

以上、ドルチェ&ガッバーナの動画が日本人に不快感を与える要因について述べてきたが、今回の騒動によって、文壇と服飾という違いがあるにせよ、同じ文化の担い手でありながら、ロラン・バルトが備えていたよう

な見識をドルチェ&ガッバーナが備えていなかった事実が露呈される形となったことは否めまい。百歩譲って悪意が100%なかったとしても、野蛮な人達に、売ってやるんだという意味にもとられかねない販売方法や演出は最大限に避けるべきであつたろう。そして、真のグローバリゼーションを目指すには、自身が持ちうる潜在的な差別意識にも目を光らせることでこれを取り除く努力をすること、また、自分たちが所属する文化圏とは全く異なる文化圏に対する、歴史的背景も含めた知識と理解が絶対的に必要なのではあるまいか。

実学の結果としての経済活動にも、言語を含む文化的教養は必須のものであると筆者には思われるのである。

（原稿受付 2022年10月26日）